「戦国の近江」地域の魅力発信事業

近江戦国探訪ガイドブック２

信長の城と戦国近江

平成 30 年（2018 年）10 月 4 日

滋賀県教育委員会

「戦国の近江」地域の魅力発信事業

連続講座「近江の城郭～信長の城と戦国近江」

滋賀県には約1300個処の城跡があり、日本史上の画期となった戦いの舞台も多く残っているなど、滋賀県は戦国遺跡の宝庫です。

今年は、永禄11年（1568）に織田信長が後の室町幕府15代将軍足利義昭を伴って上洛してから450年を迎える節目の年です。この上洛は、戦国から近世へと時代が移り変わる日本史上の転換点であるだけでなく、近江にとっても、中世近江を支配していた守護六角氏に代わって、信長による近江支配が始まるという大きな画期となった出来事です。

今年度の連続講座は、「近江の城郭～信長の城と戦国近江」と題し、近江に残る信長ゆかりの戦国遺跡をテーマに行うものです。近江の戦国遺跡の魅力を広く県内外に発信することを目的に、開催し、講座と現地探訪をセットで行います。皆さまの御参加をお待ちしております。

1．日程・テーマ

（1） 第１回「元亀争乱　江北の戦い～小谷城跡」
　　開催日：平成30年11月10日（土）

（2） 第２回「琵琶湖城郭ネットワーク～大溝城跡」
　　開催日：平成30年12月９日（日）

（3） 第３回「湖南の要・坂本城」
　　開催日：平成31年１月20日（日）

（4） 第４回「元亀争乱　江南の戦い～永原城跡」
　　開催日：平成31年２月10日（日）

（5） 第５回「信長の城と戦国近江」

①現地探訪「安土　信長の城と城下町」
　開催日：平成31年３月９日（土）
　織田信長の居城、安土城と城下町を探訪します。

②シンポジウム「信長の城と戦国近江」
　開催日時：平成31年３月10日（日）10：30～16：30
　講座会場：安土文芸セミナリヨホール（滋賀県近江八幡市安土町桑実寺777）
　内容：基調講演「信長の城」中井均氏（滋賀県立大学教授）
　　報告１「小牧山城」小野友記子氏（小牧市教育委員会）
　　報告２「岐阜城」高橋方紀氏（岐阜市教育委員会）
　　報告３「安土城」仲川靖（滋賀県教育委員会文化財保護課）
　　パネルディスカッション「信長の城と戦国近江」
　　パネラー：中井氏・小野氏・高橋氏・仲川
　　コーディネーター：松下浩（滋賀県教育委員会文化財保護課）

2．主催　滋賀県教育委員会

3．協力　長浜市・高島市教育委員会・野洲市教育委員会・坂本城を考える会

4．その他

各回の実施の詳細（集合場所、開始時刻・終了時刻等）および参加者募集については、開催の約１ヶ月前に別途ご案内いたします。

信長の城と戦国近江

永禄11年（1568)、織田信長は後の室町幕府15代将軍足利義昭（あしかがよしあき）を伴って上洛します。この上洛によって信長は中央政治に登場し、戦国から近世へと時代は大きく動きはじめます。

近江においても、信長の上洛にあたり、敵対していた近江守護六角（ろっかく）氏が居城である観音寺（かんのんじ）城（近江八幡市・東近江市）から退城します。中世近江を支配していた守護六角氏にかわって、信長による近江支配がはじまることとなります。信長の上洛は、近江の歴史にとっても大きな画期となるできごとだったのです。

その後､元亀元年（1570）４月､越前攻略のため敦賀まで出陣していた信長のもとに浅井長政（あざいながまさ）離反の知らせが届きます。この後約３年にわたって信長と近江の諸勢力とが戦う元亀争乱（げんきそうらん）の始まりです。

元亀争乱では近江各所で信長と反信長勢力の戦いが繰り広げられました。そうした中で、信長および反信長勢力双方によって多くの城郭が築かれました。湖北では浅井氏の居城小谷（おだに）城（長浜市）を攻撃するため、信長は横山城（長浜市・米原市）を奪い取り、小谷城の目の前に虎御前山（とらごぜやま）城（長浜市）を築きました。

湖南は近江守護六角氏の勢力圏でしたが、六角氏が観音寺城を退城してからは信長の勢力圏となり､居城である岐阜と京都を結ぶ重要な地域として位置づけられます。そのため信長は､永原城（野洲市)、長光寺（ちょうこうじ）城（近江八幡市)、安土城（近江八幡市　後に信長が築く安土城とは異なる）を湖南の要所に築き、家臣を配置しました。

天正元年（1573）９月、小谷城を攻めて浅井氏を滅ぼし、鯰江（なまずえ）城（東近江市）を囲んで籠城していた六角義治（よしはる）を追放したことで元亀争乱は終結し、近江から反信長勢力が駆逐されました。ここにようやく信長による本格的な近江支配がはじまることとなります。

信長は、近江を支配するにあたり、家臣に拠点となる城を築かせました。元亀２年（1571)、延暦寺焼き討ちの後、明智光秀に志賀郡（しがぐん）を領地として与え、坂本城（大津市）を築かせました。天正２年（1574）には、浅井氏の旧領を羽柴秀吉に与え、長浜城を築かせます。天正４年（1576）には、信長自身の居城安土城（近江八幡市・東近江市）を築き、天正６年（1578）には甥の織田信澄（おだのぶずみ）に大溝（おおみぞ）城（高島市）を築かせました。これら４つの城は、琵琶湖岸に築かれ、城の縄張（なわばり）に湖を取り込んでいること、城下町に中世以来の湊を組み込み、街道が近くを通ること、天主を持つ石垣造りの城であること、といった共通点があることから、信長が近江全体を支配することを目的に築いた拠点城郭であると考えられます。

守護六角氏のもとにゆるやかに統合されていた戦国近江は、信長の上洛から元亀争乱を経て徐々に近世近江へと歩みを進めていきます。天下人信長を頂点に、近江国内の拠点城郭に配置された信長家臣が、地域支配を担うようになりました。その一方で、中世以来の近江の在地領主たちは信長に従う限り、旧領を安堵されました。信長といえば旧社会を解体して新しい社会を生み出した革命児のようにイメージされていますが、実際は戦国社会の在地秩序を基本的には温存していました。戦国近江の在地秩序を取り込んだ形での近江支配､これが織田信長のよる近江支配の実態なのです。

安土城と城下町（あづちじょうとじょうかまち）

築城から廃城へ	1576	正月中旬、安土城の築城を開始する
	1577	安土山下町中に**楽市楽座の掟書**を発布する
	1579	完成した天主に信長が移り住む
	1582	摠見寺に徳川家康を迎え、能が行われる
		本能寺の変で信長死去、安土城の天主・本丸等が焼失する
	1585	豊臣秀次の八幡山城築城に伴い安土城は廃城となる
摠見寺領の時代	1592	秀吉が摠見寺に**寺領百石寄付の朱印状**を与える
	1604	豊臣秀頼、摠見寺三重塔を修理　書院・庫裏を寄進する
	1617	徳川秀忠、寺領を二百二十七石に加増、摠見寺に安土山の支配権を認める
	1682	信長百回忌が行われる
	1687	「**近江国蒲生郡安土古城図**」が作成される
	1731	信長百五十回忌が行われる
	1781	**信長二百回忌**が行われる
	1791	「**摠見寺境内絵図**」が作成される
	1832	信長二百五十回忌が行われる
	1854	摠見寺が焼失し、伝徳川邸跡に再建される
国家による支配へ	1871	上知により安土山の大半が国有地となる
	1879	摠見寺裏門を**超光寺表門として移築**する
	1901	摠見寺三重塔が特別保護建造物に指定される
	1903	摠見寺二王門が特別保護建造物に指定される
	1915	滋賀県により初めて安土山の実測調査が行われる
	1918	安土城保存を目指して安土保勝会が設立される
	1919	史蹟名勝天然紀念物保存法が施行される
史蹟安土城趾の時代	1924	安土城趾の史蹟仮指定が行われる
	1926	安土城趾が史蹟に指定される
	1927	内務省が城跡に「安土城址」の石碑を建てる
	1928	滋賀県が史蹟安土城址の管理団体に指定される
	1929	大手門跡等に標石を建て、史蹟境界柱を設置する
	1931	二の丸跡の復旧、城内石段の改修が行われる
	1940	天主・本丸の発掘調査が行われる（～1941）
特別史跡安土城跡の時代	1950	文化財保護法施行に伴い、史跡安土城跡となる
	1952	文化財保護法により特別史跡に指定される
	1960	城跡修理に着手、1975年まで継続する
	1969	安土山南麓２００００㎡の史跡地を公有化する
	1970	安土城跡を含む「近江風土記の丘」が開館する
	1978	安土城跡実測図（縮尺千分の一）を作成する
	1979	安土山南麓の県有地を仮整備する　（～1983）
	1988	第１回特別史跡安土城跡調査整備委員会を開催する
		史跡指定範囲見直しのため地籍調査を実施する
調査整備二〇年計画	1989	発掘調査を開始する
		伝羽柴邸跡で**五棟の建物跡**を検出する
	1990	環境整備の基本構想を策定する
		伝羽柴邸跡で**櫓門跡**を検出する
		１３６ｍにわたり大手道の当初ルートを確認する
	1991	伝前田邸跡で建物四棟と木樋暗渠を検出する
		黒金門に至る**大手道の全ルート**を解明する
	1992	環境整備工事に着手する
	1993	**大手門とその東西に続く石塁跡**を発見する
		東家文書を調査し**旧安土城下の絵図**を多数発見する
	1994	旧摠見寺境内地を調査し**当初の伽藍配置**を明らかにする
		現摠見寺の高石垣を解体し**当初の大手道**を検出する
	1995	百々橋口道及び主郭部周辺をめぐる周回路を調査する
	1996	搦手道の調査に着手する
		米蔵付近より**金箔貼りの鯱瓦**を発見する
	1997	搦手道の全ルートを解明する
		台所跡から**流し・カマド**とともに**飾り金具**を発見する
	1998	天主台下から焼失建物とともに多数の遺物を発見する
		―建築金物、十能・鋤、花器、金箔瓦、壁土等
		搦手口の湖辺で木簡、完形に近い金箔瓦等を発見する
		大手道の整備工事が完成する
	1999	伝本丸跡より**御殿の礎石**を検出する
		伝本丸跡東隅、伝三の丸石垣裾より**笏谷石製容器**を発見する
	2000	天主跡の調査を実施する
		伝前田利家邸跡の整備工事が完成する
		湖西より安土への**材木移送についての古文書**を発見する
	2001	大手門周辺西側より**新たな虎口２ヶ所**を発見する
	2002	大手から百々橋口の山裾から**石敷通路**を発見する
		大手門周辺東側より**新たな虎口１ヶ所**を発見する
	2003	蓮池周辺から**伝江藤邸跡の出郭**を確認する
		大手門**西虎口から大手道へのルート**を確定する
		西虎口北の郭から**カマド跡・井戸跡**を発見する
	2004	大手門周辺東側の整備工事を実施し、石塁・虎口を復元する
	2005	大手前駐車場から**内堀の石垣・胴木**を発見する。
	2007	大手口・百々橋口間で**新たな虎口２ヶ所**を発見する。

安土城の歴史

安土城の築城は、織田信長が武田勝頼（たけだかつより）を長篠（ながしの）の合戦で討ち破った翌年、天正４年（1576）に始まります。築城にあたっては、畿内・東海・北陸から多くの人夫が徴発され、当代最高の技術を持った職人たちが動員されました。まさに安土城は天下統一の拠点となるべく当時の文化の粋を集めたものだったのです。３年後の天正７年（1579）には天主が完成して信長が移り住み、信長の居城としての安土城は完成しました。しかし、天正10年（1582）に本能寺の変で信長が殺されると、城は明智光秀の手に渡り、光秀が羽柴秀吉に敗れたすぐ後に天主・本丸は焼失してしまいます。それでも安土城は織田氏の天下を象徴する城として、秀吉の庇護（ひご）のもとで信長の息子信雄（のぶかつ）や孫の三法師（さんぽうし）が入城を果たし、信長の跡を継ぐものであることをアピールします。しかし天正13年（1585）、小牧長久手の戦いで信雄が秀吉に屈すると織田氏の天下は終焉を迎え、安土城はその役目を終えて廃城となります。その後江戸時代を通じて信長が城内に建てた摠見寺（そうけんじ）がその菩提を弔いながら、現在にいたるまで城跡を守り続けていきます。

一方、安土城跡は大正15年（1926）に史蹟に、昭和27年（1952）には特別史跡に指定され、国によって文化財として保護されていくことになります。また昭和15・16年（1940・41）には天主・本丸の調査と仮整備が行われ、昭和35年（1960）以降には本丸周辺から黒金門にかけての石垣修理が行われるなど、城跡の整備も進んでいきます。

平成元年（1989）度からは、安土城を未来にわたって永く保存し、広く活用を図っていくために、特別史跡安土城跡調査整備事業が20年計画でスタートしました。発掘調査では城の内外を結ぶ大手（おおて）道・百々橋口（ど

どばしぐち）道・搦手（からめて）道と、伝羽柴秀吉邸跡・伝前田利家邸跡・伝武井夕庵（たけいせきあん）邸跡・伝織田信忠邸跡・旧摠見寺跡などの道沿いの郭（くるわ）群、天主・本丸跡を中心とする主郭とその周辺部、百々橋から大手門推定地・内堀跡、蓮池（はすいけ）周辺を経て北腰越（きたこしごえ）にいたる安土山南面山裾部の調査が行われました。また調査成果にもとづいて遺構を整備する環境整備については、大手周辺から黒金門（くろがねもん）跡にいたる大手道と道沿いの伝羽柴邸跡・伝前田邸跡・伝武井邸跡・伝信忠邸跡の整備工事が行われ、郭整備や石垣・石段の復元などが行われました。こうして特別史跡安土城跡調査整備事業は、平成20年（2008）度をもって終了しました。

大手道・大手門（おおてみち・おおてもん）周辺地の調査

大手道は大手口と城内を結ぶルートです。大手口から直線的に180m進み、主郭部へとつながっていきますが、発掘調査により伝信忠邸跡を通り、黒金門（くろがねもん）に至るルートと、伝三の丸跡南虎口に通じるルートがあることが分かりました。道幅は直線部で約８mと他のどの城内道よりも広く、また直線部では道の両側に石敷側溝（いしじきそっこう）と石塁（せきるい）を持つという構造を有しています。

大手門は現在の石段の麓よりさらに80mほど南に下がった場所にあったと考えられます。門の遺構自体は破壊されていましたが、門の東西にのびる石塁が発見されました。ここからは、大手門跡の他に虎口（こぐち）が３箇所新たに発見されました。大手門から東西に延びる石塁の東端から平（ひら）虎口を１ヶ所と、西端から枡形（ますがた）虎口１ヶ所・平虎口１ヶ所が発見されました。大手門と両脇２門は、天皇行幸（ぎょうこう）のための儀式のために設けられた門と思われ、都城（とじょう）の内裏（だいり）の門にならったものという説もあります。

この他、大手南面の景観はこれまで石塁まで湖が入り込んでいるように考えられていましたが、陸地がもっと南まで広がっており、現在見られる景観とほぼ同じであることが分かりました。

左　：発掘調査中の大手道
右上：大手口全景
右下：大手東虎口

屋敷地の調査―伝羽柴秀吉邸跡・伝前田利家邸跡（でんはしばひでよしていあと・でんまえだとしいえていあと）―

伝羽柴邸跡と伝前田邸跡は大手道直線部を挟んで両側に位置する屋敷地です。道の西側にある伝羽柴邸跡は上下２段の郭で構成されており、その間を幅２m程の通路（武者走り）が結んでいます。下段部からは城に使われた最古の櫓門（やぐらもん）と巨大な厩（うまや）が、上段部からは屋敷の中心施設である主殿（しゅでん）、台所とそれを守るための隅櫓（すみやぐら）が発見されており、１つの屋敷地の建物構成が全て明らかになった貴重な事例ということができます。

道の東側の伝前田邸跡は上下３段の郭で構成されています。大手道から入る虎口は内枡形となっており、その先には厩があり、さらに進むと石段を登って奥座敷につづきます。正面には主殿へあがるための２つの石段があり、南側の広い石段は中心建物へと続く道です。北に延びる狭い石段は、多聞櫓（たもんやぐら）の下をくぐって台所・遠侍（とおざむらい）に至ります。また多聞櫓の床下にあたる部分から木樋（もくひ）が発見されました。洗い場の水を流すための排水施設だと考えられます。

伝羽柴邸跡・伝前田邸跡からは土器、陶磁器など多数の生活遺物が出土しており、城内で生活が営まれていたことが分かります。また茶器（ちゃき）や香炉（こうろ）など嗜好品も出土しており、合戦とは無縁の優雅な生活も存在していたことがうかがえます。

左　：伝羽柴邸跡上段部
右上：伝羽柴邸櫓門跡
右下：伝前田邸跡

主郭部（しゅかくぶ）の調査

天主・本丸がある主郭は城の中心部であり、主郭外周をめぐる道からは数多くの門や武者隠しなどが発見され、綿密に計画された高い防御性がうかがえます。主郭部北虎口付近やそれに隣接する伝台所郭からは複数の建物礎石が発見されましたが､それらは共通した計画線上に据えられており、互いに独立した建物ではなく、虎口から伝台所郭全体を覆うような一連の大規模な建物であった可能性があることが分かりました。この他、伝二の丸東溜まりでは建物の礎石上に焼け残った柱の部材や建ったまま焼け残った壁が発見され、炎上の様子を生々しく伝えるとともに、城内の建物についての貴重な情報を提供しています。また炎上の跡が発見されたのはこの主郭部の中だけです。

主郭部からは数多くの遺物も出土しています。金箔（きんぱく）瓦や金箔鯱（しゃちほこ）、飾り瓦、鬼瓦など各種の瓦類が多数出土しているほか、金具や花器と思われる陶器などが出土しています。

伝本丸跡の調査では、建物礎石が全て確認されましたが、後に豊臣秀吉が建てた、内裏にある天皇の御殿である清涼殿（せいりょうでん）と同じ平面を持つ建物であったことがわかりました。

天主穴蔵部分の調査では、戦前の調査で報告されていた漆喰（しっくい）については使用していなかったことが分かりました。また本柱に伴う側柱の礎石や礎石抜き跡が数ヶ所新たに確認されました。最大の関心事であった穴蔵中央の穴については、前回の調査で攪乱を受けていることが確認され、穴の機能を確定することはできませんでした。また、物理探査を実施した結果、天主台が自然の岩盤層を基礎として、これを整形した上に築かれていることが明らかになりました。天主台の普請の様子が具体的になってきたという点で貴重な発見です。

左上：主郭部北虎口
左下：伝本丸跡
右上：伝二の丸東溜り
右下：金箔鯱復元

摠見寺跡（そうけんじあと）と百々橋口道（どどばしぐちみち）の調査

城下町と城内を結ぶ百々橋口道は唯一記録上に現れる道です。調査の結果、石段は改修されていましたが、ルート自体は変化がなかったことが確認されました。摠見寺は信長が安土城内に建立した寺です。嘉永７年（1854)に主要な建物が焼失して現在の場所に移されましたが､それまでは百々橋口道上で信長の菩提を守り続けてきました。調査では、本堂をはじめ多くの建物跡が発見されました。創建当初のものとしては本堂・拝殿・鎮守社・二王門・三重塔・表門・裏門だけですが、豊臣秀頼が建立した書院・庫裡や、江戸時代中期以降に建てられた数棟の建物跡が発見されています。

旧摠見寺跡遺構全景

搦手道（からめてみち）の調査

搦手道は、安土山の東麓から城内に入る道です。調査の結果、道の下半部では石段を使わないスロープになっているのに対し、上半部は折れ曲がった石段が続くことが明らかとなりました。山裾の部分はかつて湖であったところと接しており、船を通すために浅瀬を掘った溝状遺構が発見されました。またここからは荷札と思われる木簡（もっかん）が出土しており、道の構造と合わせ、搦手道は物資を城内に搬入するためのルートではないかと考えられます。

搦手道

搦手口溝状遺構

安土山南面山裾部（あづちやまなんめんやますそぶ）の調査

大手門から百々橋口にかけてでは、石垣の裾から石敷き道が発見されました。この道が大手門前の広場につながることや、道から石垣に取り付く虎口が存在しないことなどから、この石垣が城の外郭の石垣であることが分かりました。一方、蓮池周辺地区ではこうした石垣や通路の存在は確認できず、上下段の郭同士が虎口で結ばれていることや、伝江藤邸跡ともつながっていることから、ここが城内に位置することが確認されました。城の外郭はもっと南にあったと考えられます。ちなみ現在の蓮池は戦後の整備の中でつくられたものです。

山裾部の郭部からは建物遺構は発見されていません。また出土遺物からも生活の痕跡は見られず、南面の外郭部に位置するということからみて、城の防御を担うための郭群であったと考えられます。

大手～百々橋間虎口

蓮池周辺虎口

内堀跡（うちぼりあと）の調査

安土山と県道大津能登川長浜線との間からは、県道の北約100mの地点で、東西方向の石垣が検出されました。石垣は、基礎の部分に胴木（どうぎ）を据えていましたが、胴木は、泥地などの軟弱地盤に石垣を築く際、石が不等沈下を起こして石垣が崩れるのを防ぐために据えるもので、このためこの石垣が堀の石垣であることがわかりました。

またその石垣の延長上から南側に突出した部分が発見されました。突出部の位置は、ちょうど大手門推定地を真っ直ぐ南に下った場所にあたります。そうしたことから、この突出部については、大手門に関連した施設ではないかと考えられます。具体的には、内堀の南側を通る街道から橋を架けるための橋台、もしくは船着き場になるのではないかと推測されています。

内堀跡突出部の石垣

石垣基礎の胴木

特別史跡安土城跡の環境整備

大正15年（1926）に安土城跡は史蹟指定され、国によって文化財として保存されることになりました。昭和27年（1952）には文化財保護法による特別史跡に指定されました。ただ、城内は信長廟など一部の場所を除き、灌木が生い茂り、石垣が各所で崩れた荒れた状態になっていました。

昭和15・16年（1940・41）には整備を目的として天主・伝本丸跡の調査が行われ、検出した遺構の部分的な整備が行われました。昭和35年（1960）から50年（1975）にかけては、石垣の積み直し等本格的な修理工事が実施されました。

平成元年度（1989）から20年度（2008）にかけて、安土城跡の保存と活用を図るため、発掘調査とその成果に基づく環境整備が実施されました。環境整備では、遺構を大切に保存することを基本として、現状に即した整備が行われ、必要な部分のみ復元しています。また史跡指定地内には、当時の建物としては旧摠見寺の二王門と三重塔が現存していますが、それ以外の建物を復元する計画はありません。

道（みち）の整備

発掘調査で検出した踏み石を用いながら、欠損部分については付近で発掘した石材や同質の石材を用いて補い、築城当時の石段を復元しています。両側の石塁や溝についても同様の方法で整備が行われています。

大手道石段の整備

郭（くるわ）の整備

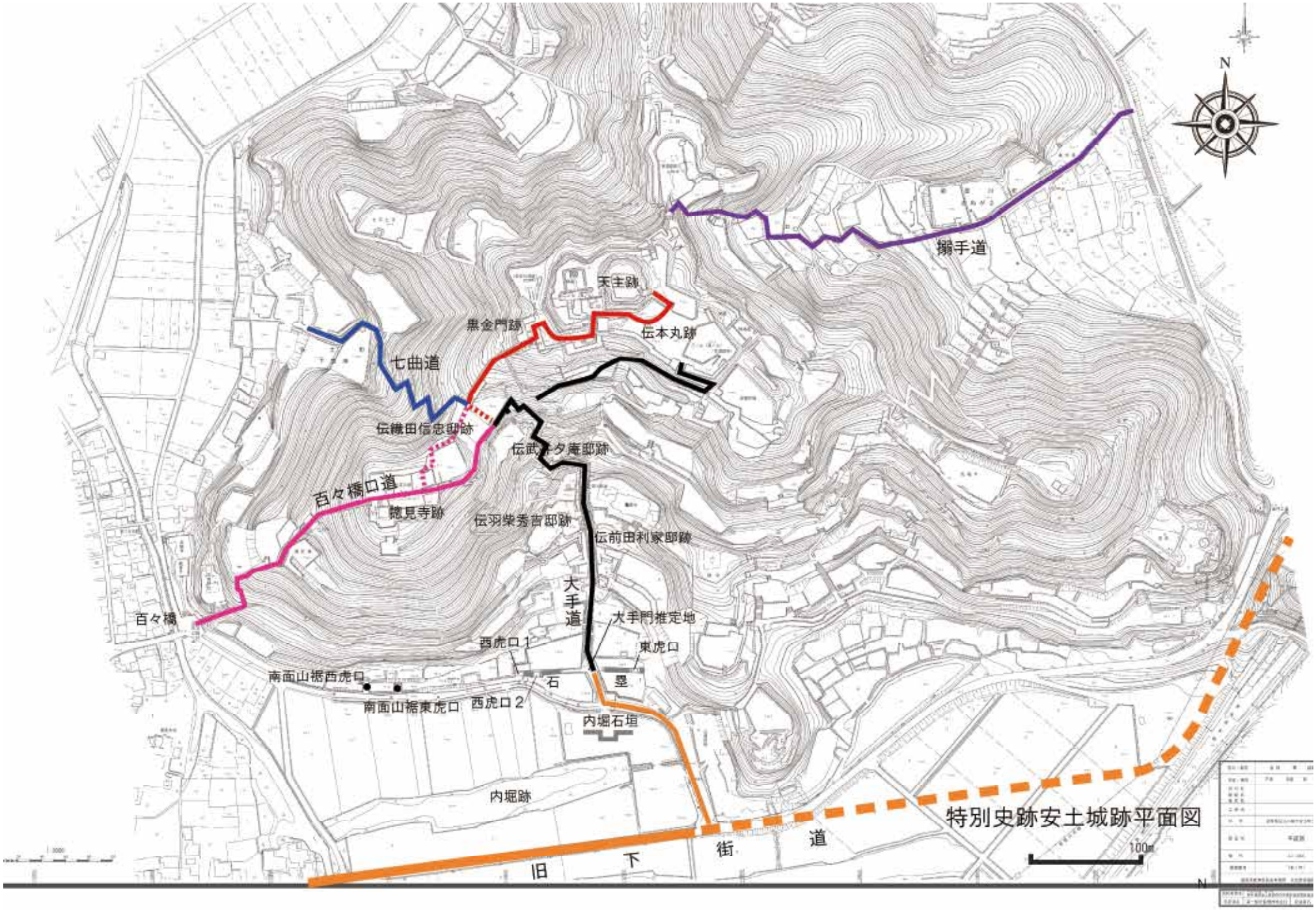
平坦部は遺構を保護するために透水性の土舗装で覆われています。発掘調査で検出された石組溝や石段の踏み石で欠失した部分は同質石材を用いて復元しています。礎石は原則的に検出されたものをそのまま展示していますが、礎石が小さい場合はその上に保護盛土を行い、直上に模擬礎石を置いて位置を示す等の方法により展示が行われています。

伝羽柴邸跡下段部郭整備

石垣（いしがき）の整備

安土城の石垣は、花崗岩（かこうがん）の石仏等以外は安土山や繖山をはじめ、湖東地方で産出される湖東流紋岩（ことうりゅうもんがん）という石が用いられています。石垣はほとんど加工せず、自然石を巧みにつかって積み上げられています。整備にあたってはこれら石垣の調査が行われ、築城時の石垣を大切に保存することを基本にして、安全のために必要な部分だけを当時の工法で復元しています。

伝羽柴邸跡石垣整備


N
搦手道
天主跡
黒金門跡
伝本丸跡
七曲道
伝織田信忠邸跡
伝武井夕庵邸跡
百々橋口道
聽見寺跡
伝羽柴秀吉邸跡
伝前田利家邸跡
大手道
百々橋
大手門推定地
西虎口1
東虎口
南面山裾西虎口
南面山裾東虎口
西虎口2
石
垣
内堀石垣
内堀跡
旧
下
街
道
特別史跡安土城跡平面図
100m

安土城下町の歴史と構造

安土城下町は現在の近江八幡市安土町下豊浦・上豊浦・常楽寺・慈恩寺・小中周辺に比定されます。この辺りは、中世以前には薬師寺領豊浦庄（やくしじりょうとようらのしょう）があったとされる場所で、安土城下町の成立にあたって、これら荘園の集落が取り込まれていったことが想像できます。つまり安土城下町は信長によって新しく創出された町ではなく、既存の集落を利用して形成されたものだったのです。ところで、安土城下町の構造上の特徴の１つに、城下町の中に大きく３方向の町割が存在することが上げられます。常楽寺・慈恩寺・小中付近の町割は古代に設けられた蒲生郡条里の方向に一致します。それより東の下豊浦・上豊浦付近では町割の軸線が約20度東へ振れており、下豊浦の東端、新町といわれている三角形の場所ではさらに約20度東へ、町割の軸線が振れています。このことから、常楽寺付近では旧来の町割を利用し、下豊浦以東では新しく町割を創出したと考えられてきました。しかし、下豊浦以東の２つの町割の軸線は、それぞれ活津彦根神社（いきつひこねじんじゃ）への参道と新宮神社（しんぐうじんじゃ）への参道に一致しています。いずれの神社も城下町成立以前から当地に存在したものであることからすれば、これらの町割は新しく創出されたものではなく、既存の町割を利用したものといえるのではないでしょうか。

信長は安土城下町に対して13ヶ条の掟書を出し、楽市楽座（らくいちらくざ）をはじめとした都市政策を実施します。それは、城下町を安全と自由が保障された場所とすることで、人々の集住をうながそうというものでした。また、それまでの戦国大名の城下町とは異なり、町人が居住する地域と商売を行なう地域とを区別せず、城下町全体を楽市としました。こうした一体化は近世の城下町に見られる構造ですが、安土城下町はその近世城下町の出発点と評価されています。しかし最近の調査研究では、こうした評価に再検討を迫る成果が出されています。特に、安土町内での文書調査から元禄期の資料とは言え「惣構どて」と書かれた絵図や「（前略）信長公御在城之時分□惣郭之土堤を打開、寺地与仕、（後略）」と書かれた文書が新たに発見され、城下町が「惣構どて」によって二分されていたことが明らかになりました。これを、戦国期城下町の構造と類似の二元構造と見るか、近世城下町に見られる住み分けの萌芽と見るか、見解が大きく分かれています。

また、街路についても幾重にも屈曲した下街道や、内町の各所に見られる丁字路・カギ型路など、城下町特有の防御策が講じられていました。そして城下の西端は、浄厳院や寺内町ではと言われる常楽寺の町と、その西の大江川、北は内湖、東は安土城の外堀から続く掘り割りと湿地、南は常楽寺山で四至（しいし）が囲まれ、自然地形を巧みに利用した中で惣構が形成されていました。これらは戦国期城下町の構造と類似しているともいえます。

従来、安土城とともに、安土城下町についても近世の出発点として、新しい側面ばかりが強調されてきました。しかし、詳細にその実態を検討してみると、中世末という時代の制約を受けたものであったことがよく分かります。古い要素と新しい要素の混在こそが安土城や城下町の特徴なのです。

活津彦根神社（いきつひこねじんじゃ）

祭神は活津彦根命（いきつひこねのみこと）。社蔵の十一面観音像に「庄神」と書かれており、豊浦庄の鎮守であったと考えられています。聖武天皇の病気平癒祈願のため、右大臣藤原豊成（ふじわらのとよなり）が参籠したとされています。江戸時代の絵図には「下村・平井村宮」として描かれています。現在は本殿・拝殿・中門・幣殿と境内社である蛭子社（えびすしゃ）があります。このうち本殿は、寛永３年（1626）の年号が記された棟札を持ち、近江八幡市指定文化財となっています。

新宮神社（しんぐうじんじゃ）

祭神は速玉男命（はやたまおのみこと）。天承元年（1131）の創建と伝えられますが確証はありません。確かなところでは近江八幡市安土町正禅寺所蔵の大般若経に、応永14年（1403）に「豊浦新宮大社」に経典を奉納したことが記されており、城下町以前から存在したことが分かります。江戸時代の絵図には「東村宮」として描かれています。現在は本殿である大宮社の他、聖社・若宮社・早玉社・大神宮・津島社の境内社と拝殿があります。社蔵の絹本著色十六善神像と本殿・拝殿が近江八幡市指定文化財となっています。

セミナリオ跡

織田信長は、安土城下にキリスト教の宣教師たちの屋敷を与えました。屋敷は３階建てで、城下で唯一瓦を葺くことが許されました。１階・２階は宣教師の住居で、３階がキリスト教の神学校であるセミナリヨでした。ここでは生徒たちがラテン語や日本語、音楽など学んでいました。

ただ、セミナリヨの遺構は見つかっておらず、正確な場所は不明です。現在、セミナリヨ跡とされている場所は、「だいうす」という古い地名が残っており、これをゼウスが転じたものとしてセミナリヨ跡に比定されたものです。一方、ここより約300m北に、「主の御座」という地名があり、これもキリスト教由来と考えられることから、こちらをセミナリヨ跡に比定する説もあります。

惣構どて（そうがまえどて）

江戸時代の絵図に、「惣構どて」が描かれています。現在の安土コミュニティセンターの南側付近にあたります。また別の江戸時代の古文書には「信長時代の惣郭の土提を切り開いて寺地とした」と書かれており、安土城にともなうものかどうかは別として、現実に土手があったことがわかります。現在は、土手の痕跡は全くありません。

沙沙貴神社（ささきじんじゃ）

祭神は少名彦名命（すくなひこなのみこと）、大彦命（おおひこのみこと）、仁徳天皇（にんとくてんのう）、宇多天皇（うだてんのう）・敦実親王（あつざねしんのう）の四座。延喜式神名帳（えんぎしきしんめいちょう）に記載された同名の神社に比定されています。また、中世近江を支配した近江源氏佐々木氏の氏神として知られています。天正９年（1581）に、信長から雁・鶴を与えられた返礼に、町人たちが沙沙貴神社で能を催したことが『信長公記』に記されています。現在は、本殿・中門・透塀（すかしべい）・権殿（ごんでん）・拝殿・楼門・東廻廊・西廻廊の建物があり、いずれも滋賀県指定文化財となっています。

浄厳院（じょうごんいん）

浄厳院は、浄厳坊隆堯（じょうごんぼうりゅうぎょう）が近江国栗太郡の金勝山（こんぜやま）（現滋賀県栗東市）に結んだ草庵（後の阿弥陀寺）に起源を持つ浄土宗寺院です。鷹狩りの途中で阿弥陀寺８世応誉明感（おうよみょうかん）に出会い、その人徳に感じ入った信長がこれを安土城下に呼び寄せ、寺院を建立しました。天正７年（1579）、浄土宗と法華宗との間で行われた安土宗論の舞台となったことでも有名です。本堂、楼門、不動堂、釈迦堂、茶所、鐘楼、観音堂、裏門、書院、庫裏、鎮守社、春陽院、誓要院などの多くの建物があります。現在、本堂と楼門が重要文化財に指定されているほか、多数の什物が文化財の指定を受けています。

常楽寺港（じょうらくじこう）

中世からの荘園年貢の積出港として知られています。長命寺文書の中には、赤野井（滋賀県守山市）の年貢を長命寺まで運んできた「常楽寺船人」に対し、食事と宿を提供したことが記されており、中世の常楽寺に水運を生業とする人々がいたことが確認できます。織田信長も、安土築城前から常楽寺を頻繁に利用しており、その港湾機能に注目していた様子がうかがえます。現在は、常浜公園として整備された中に、船入の痕跡が残ります。

木村城跡（きむらじょうあと）

土豪木村氏の城館があったとされるところです。木村氏は六角氏の被官でしたが、信長の近江侵攻後はこれに随い、一族の木村次郎左衛門尉（きむらじろうざえもんのじょう）は安土城下町の町奉行となります。木村城跡は近江八幡市安土町大字常楽寺字木村に比定され、常楽寺港につながる水路を堀として利用していたようです。現在は畑となっていますが、かつての堀が水路として残っています。

旧伊庭家住宅（きゅういばけじゅうたく）

住友家第２代総理事伊庭貞剛（いばさだたけ）が建てさせた邸宅です。伊庭貞剛は、蒲生郡西宿村（現近江八幡市）の生まれで、司法省を経て住友家に入り、別子銅山煙害問題などに力を尽くし、57歳で引退した後は石山（滋賀県大津市）の別荘で余生を送ります。この邸宅は、大正２年（1913）に完成したのち、後に安土村長を務めた伊庭貞剛の四男伊庭慎吉（いばしんきち）が暮らすことになりました。設計を担当したのはアメリカ人の建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズです。構造は木造３階建て。洋風の外観を持ちながら巧みに和風を取り入れたヴォーリズ初期の意欲的な作品で、近江八幡市指定文化財となっています。

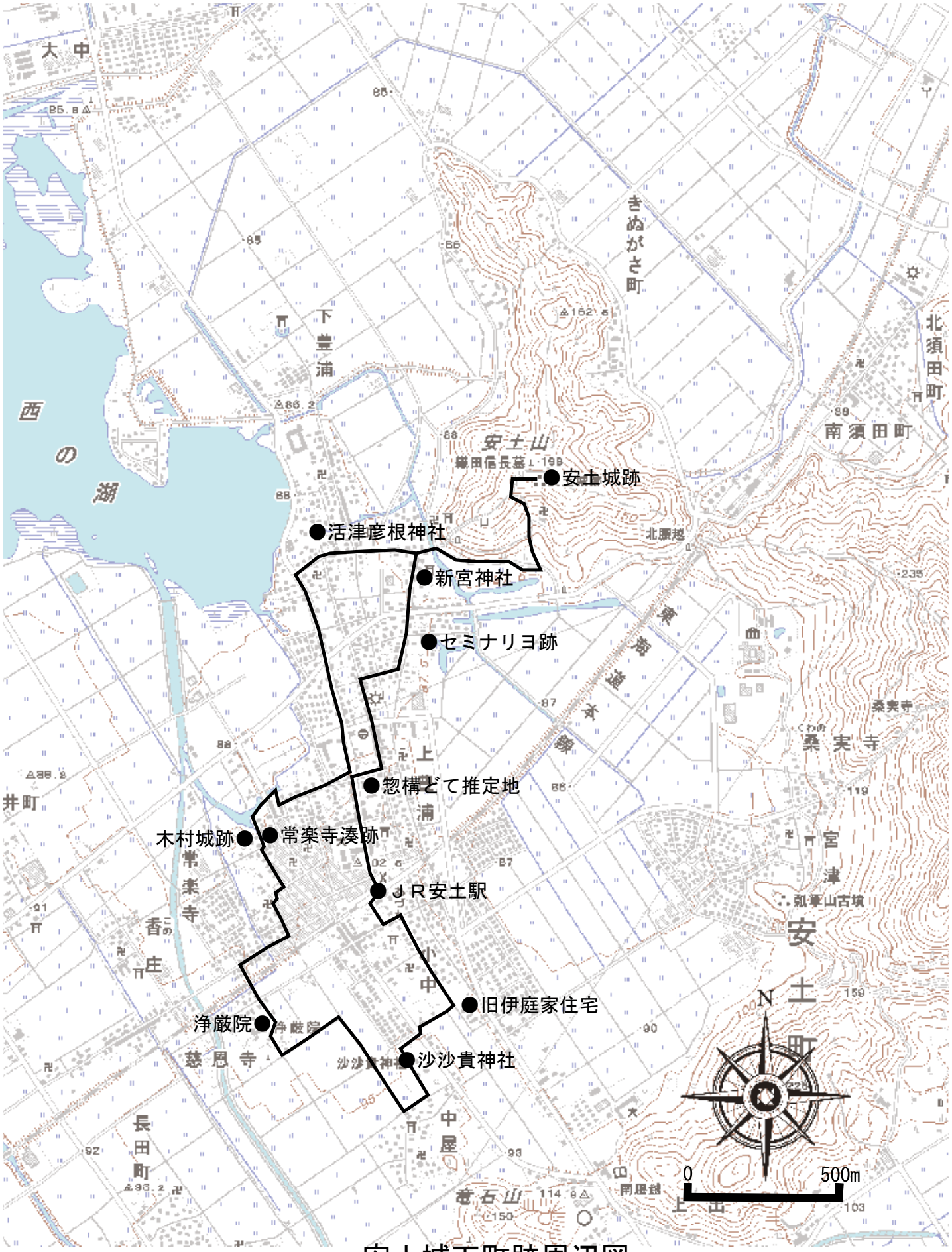
城下町を通る主な道

下街道（しもかいどう）

安土城下町の中を通る街道です。当時の主要道であった東山道（とうさんどう）とどのあたりでつながるかは分かりませんが、信長が安土城下町建設にあたり、東山道から城下町へ人々を立ち寄らせるために整備した道です。江戸時代には、朝鮮通信使（ちょうせんつうしんし）がここを通って江戸へ向かったことから朝鮮人街道とも呼ばれています。

景清道（かげきよみち）

東山道から繖山（きぬがさやま）の南麓、石寺（いしでら）をとおり、繖山中の鳥打峠（とりうちとうげ）を越え、桑実寺（くわのみじ）から小中の集落を経て浄厳院の門前をとおる道です。かつて平安末期の武将平景清（たいらのかげきよ）が尾張より京都へ行く際にとおったことに由来するといわれています。あるいは主要道をさけて通る「かげのきょうみち」からきているとする説もあります。


安土城跡
活津彦根神社
新宮神社
セミナリヨ跡
惣構どて推定地
木村城跡
常楽寺湊跡
ＪＲ安土駅
旧伊庭家住宅
浄厳院
沙沙貴神社
西の湖
安土山
織田信長墓
大中
下豊浦
きぬがさ町
北須田町
南須田町
北腰越
東海道本線
上豊浦
桑実寺
宮津
安土町
常楽寺
香の庄
慈恩寺
長田町
中屋
上出
0
500m
N

安土城下町跡周辺図

元亀争乱　江北の戦い

永禄13年（1570）４月、越前攻撃のため出陣した織田信長は、越前入国を前にして浅井長政（あざいながまさ）離反の知らせを受け取ります。このまま越前攻撃を続行すると背後を浅井氏につかれ、挟撃されることになるため、信長は越前攻撃をあきらめ、急きょ京へととって返します。若狭街道を通り、朽木谷（高島市）の領主朽木元綱（くつきもとつな）の助けを得て危機を脱しました。

信長の妹お市の方を正室に迎えていた浅井長政がなぜ離反したのかは明らかではありません。そのことは信長自身にもわからなかったようで、離反の知らせを受けても最初は信じませんでした。しかし、何度も届く離反の報告に、ついに事実であると認識し、撤退を決断したのです。

京へ戻った信長は、居城の岐阜に戻ります。対して浅井氏も江濃国境付近に城を築き、信長の西進を食い止めようとします。この時築かれた「たけくらべ・かりやす」の城は、長比（たけくらべ）城跡（米原市）、上平寺（じょうへいじ）城跡（米原市）に比定されています。

信長を食い止めるために築かれた両城ですが、城を守備していた堀秀村（ほりひでむら）・樋口直房（ひぐちなおふさ）が信長によって調略され、その役割を果たさないまま開城します。こうして近江に進入した信長は、浅井氏の居城小谷城（長浜市）を攻撃しますが、この時は城下を放火したにとどまっています。かわりに、小谷城の南に位置する横山城（長浜市・米原市）を攻撃すると、朝倉氏の援軍を得て浅井氏は小谷城を出て姉川の北に布陣します。対して織田信長と徳川家康の連合軍も姉川の南に布陣しました。６月28日両軍は激突し、姉川を血で染める激戦の末、織田・徳川連合軍が勝利し、浅井・朝倉連合軍は撤退します。信長は余勢をかって小谷城を攻撃しますが落とせず、かわって横山城を奪いとり、湖北攻略の足掛かりとしました。また、浅井氏の家臣磯野員昌（いそのかずまさ）が守る佐和山城（彦根市）を開城させます。この二つの城をおさえたことで信長は浅井氏の南下をおさえて岐阜と京とのルートを確保しました。

両者の戦いが決着するのは３年後の天正元年（1573）のことです。小谷城の西方に位置し、信長軍の北上を阻んでいた山本山城（長浜市）の城主阿閉貞征（あつじさだゆき）の調略に成功した信長は、小谷城の攻撃を開始します。８月12日、小谷山の最高所に陣取る越前衆を追い落とした信長は、援軍に駆け付けた朝倉義景（あさくらよしかげ）が越前に撤退するのを追撃し、遂にこれを滅ぼします。その後戻った信長は、小谷城に攻め上り、籠城する浅井久政（あざいひさまさ）・長政父子は自刃します。お市の方は、３人の娘とともに城を脱出し信長のもとに戻りました。

浅井氏の旧領は、浅井攻めにもっとも功績のあった羽柴秀吉に与えられ、秀吉は湖岸の長浜に城を築きます。秀吉による、湖北地方の支配がはじまりました。

小谷城跡（おだにじょうあと）

小谷城（長浜市）は、江北の戦国武将浅井氏の居城です。浅井氏の出自は明確ではありませんが、近江国浅井郡丁野郷（長浜市小谷丁野町）を本拠とする国人（こくじん）領主で、北近江を支配した京極氏の被官（ひかん）でした。浅井氏が歴史の上に登場するのは亮政（すけまさ）の代からです。亮政は、北近江の国人たちが連合した国人一揆（こくじんいっき）のメンバーでしたが、主君である京極高清（きょうごくたかきよ）の後継者をめぐる争いの中で台頭し、一揆のリーダーとなっていきました。こうして亮政は京極家中での地位を高め、やがて主君をも凌駕する力を持つようになり、江北を代表する勢力として江南を本拠とする守護六角（ろっかく）氏と対抗していきます。亮政の子の久政（ひさまさ）の代には六角氏に圧倒され、これに従うようになりますが、その子長政（ながまさ）はこうした状況に不満を持つ家臣たちと共謀し、久政を隠居させます。永禄３年（1560）の野良田（のらだ）（彦根市）の戦いで六角氏を討ち破った長政は、これ以後自立した領主権力として江北を支配するようになります。

小谷城は、標高435mの小谷山に築かれた巨大城郭です。その規模の大きさから、戦国五大山城の一つに数えられています。築城の時期は明らかではありませんが、浅井亮政が京極高清・高延（たかのぶ）父子を小谷城に迎えた大永５年（1525）以前と考えられています。その後３代にわたって浅井氏の居城となりますが、天正元年（1573）９月、織田信長の攻撃により小谷城は落城し、浅井氏は滅亡しました。

小谷城の構造は、標高435mの最高所に位置する大嶽（おおづく）を頂点とし、そこから南北方向に尾根が２本伸びています。東側の尾根筋には主要な郭群が集まっており、城内最大の郭である大広間を中心に大堀切（おおほりきり）を挟んで北に京極丸（きょうごくまる）、山王丸（さんのうまる）といった郭がつらなっていました。西側の郭群には出丸（でまる）的な郭が距離をおいて２ヶ処存在します。２本の尾根の間が清水谷（きよみずだに）と呼ばれる地域で、浅井氏の屋敷をはじめ、家臣たちの武家屋敷が広がっていました。

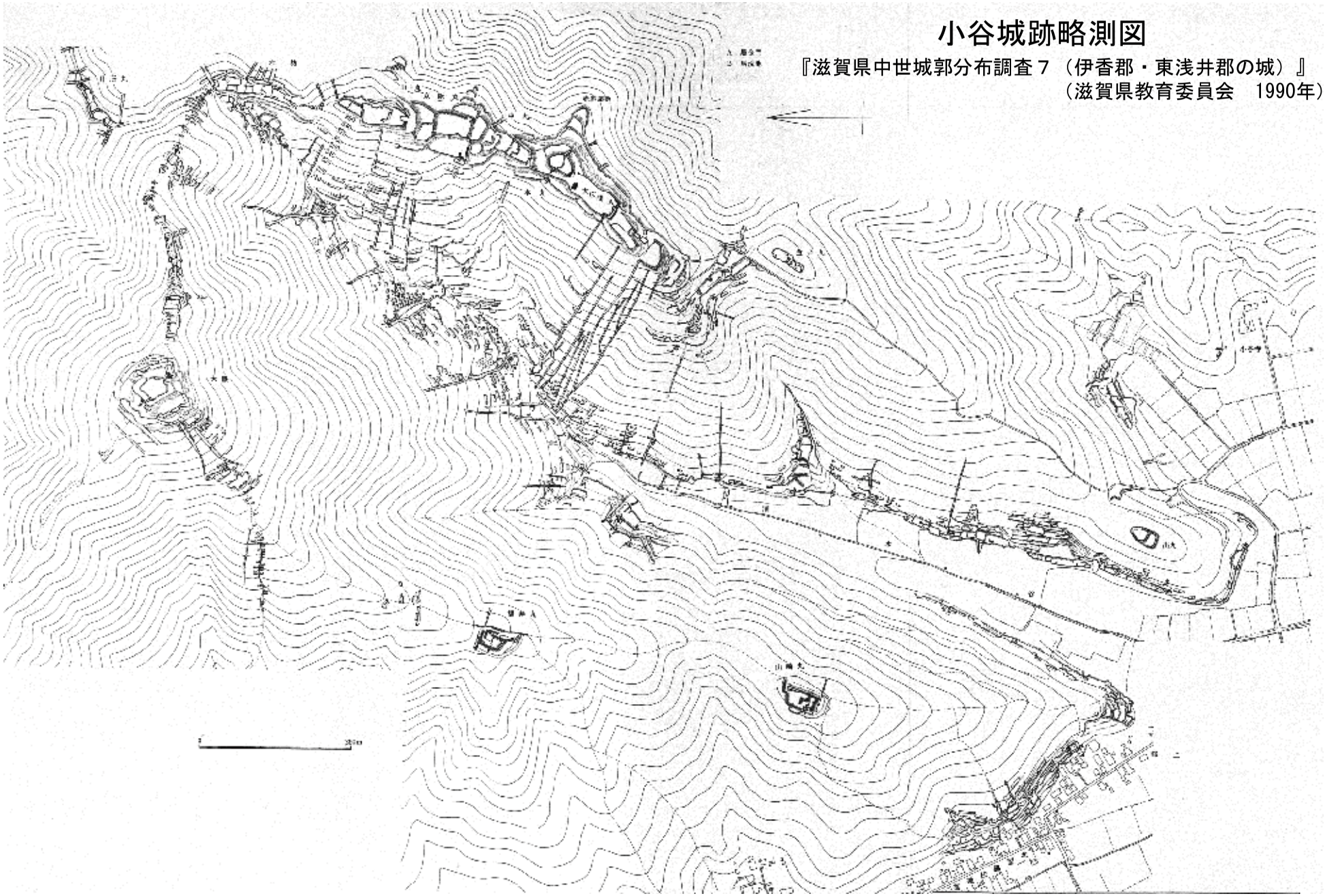
小谷城跡では東側の郭群において過去に数度の発掘調査が行われており、建物礎石や日常の生活雑器などが検出されています。特に大広間南側で検出された御殿跡周辺では、３万点を超す土師器皿が検出され、酒宴や儀式などがおこなわれていたことがうかがわれます。

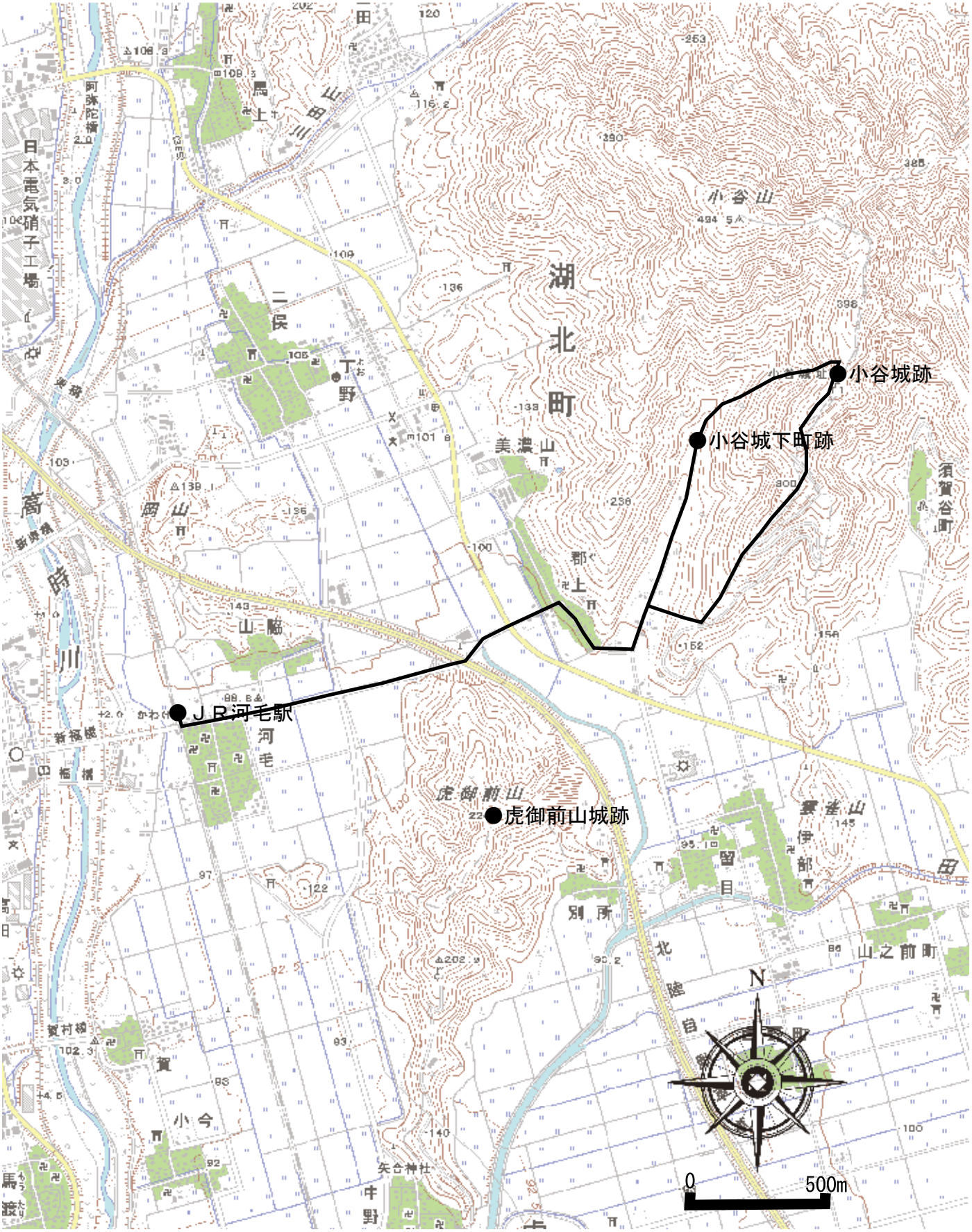
最近行われた清水谷の発掘調査では、浅井氏が暮らしたとされる御屋敷跡から石組溝と土塁が見つかりました。周辺からは銅銭や皿、水がめの破片などが出土しています。御屋敷についてはこれまで古絵図に描かれていただけでしたが、この発掘調査によって初めてその遺構が確認されました。

小谷城跡大広間

小谷城跡略測図

『滋賀県中世城郭分布調査７（伊香郡・東浅井郡の城）』
（滋賀県教育委員会　1990年）




小谷城跡
小谷城下町跡
ＪＲ河毛駅
虎御前山城跡
小谷山
湖北町
美濃山
日本電気硝子工場
高時川
河毛
小今
山之前町
須賀谷町
N
0
500m

小谷城跡周辺図

琵琶湖城郭ネットワーク

近江国の中央に広がる琵琶湖。琵琶湖は、古来より物資流通の幹線として、あるいは東国と西国、日本海と伊勢湾を結ぶ、東西南北の交通の要として機能していました。近江を支配する領主権力にとって、琵琶湖をどのように支配するかは、重要な課題だったのです。

しかし信長以前、中世において琵琶湖を支配した権力は存在しませんでした。琵琶湖には堅田（かたた）（大津市）をはじめとした湖上勢力が各地に存在しており、自立的な活動を行っていたのです。近江守護六角（ろっかく）氏も湖上勢力を完全に支配下に置くことはできませんでした。

湖上勢力をはじめて支配下に置いたのが信長でした。永禄11年（1568）の上洛に際し、信長が発給した禁制の中に沖島（近江八幡市）宛のものがあります。その条文の中に、廻船への違乱禁止の条項が含まれてました。沖島は琵琶湖最大の島であり、信長が沖島の水運力を保護することで、これを掌握しようとする意図がうかがえます。元亀元年（1570）には堅田の町を攻撃し、堅田を掌握しました。以後、堅田の水軍は信長のもとで江北浦々への攻撃に参加しています。また信長は打下（うちおろし）（高島市）の土豪林員清（はやしかずきよ）や長命寺（近江八幡市）とも関係を取り結び、これらを水軍として利用しています。

元亀争乱の終焉によって近江国内の反信長勢力は一掃され、琵琶湖を舞台とした合戦も行われなくなります。湖上勢力も水軍としての役割を終え、以後、物資や人の運搬など経済的な面での活動に特化していきます。

信長の琵琶湖支配も、経済面を重視したものになっていきます。そのため、信長は琵琶湖の主要な湊を押さえる位置に拠点となる城郭を築きました。元亀２年（1571）、比叡山焼き討ち後、志賀郡（しがぐん）を明智光秀に与え、坂本（大津市）に居城を築かせます。天正２年（1574）には、羽柴秀吉に浅井氏の旧領湖北三郡を与え、長浜（長浜市）に城を築かせます。天正４年（1576）には自身の居城として安土城（近江八幡市・東近江市）を築き、天正６年（1578）には甥の織田信澄（おだのぶずみ）に、大溝（おおみぞ）城（高島市）を築かせます。琵琶湖をほぼ等間隔で取り囲むように築かれたこれら４つの城の配置を「琵琶湖城郭ネットワーク」と呼んでいます。これら４つの城は、琵琶湖岸に築かれ、中世以来の湊を城下町に組み込み、主要街道が城の近くを通るなど、琵琶湖の水運と陸上交通の両面を掌握することが可能な場所に築かれました。また、石垣造りで天主を持つなど、城として共通する要素を持っており、信長の意思のもと統一したスタイルで築かれたことは明らかです。信長は、それまでにはなかった新しいタイプの城を近江の要所に築くことで、近江支配の新段階を目に見える形でアピールしようとしたのではないでしょうか。

大溝城跡（おおみぞじょうあと）

大溝城は、天正６年（1578）、織田信長が琵琶湖の制海権の掌握と高島郡の支配拠点として、甥の織田信澄に築かせた城郭です。縄張りは明智光秀が行ったと伝えられます。城は琵琶湖の内湖乙女ヶ池を天然の要害として巧みに利用した水城です。「大溝古城郭之絵図」（江戸時代）には方形の本丸の南東隅に天守があり、他の角にも櫓が描かれています。平成29年（2017）度に高島市教育委員会が実施した発掘調査では、絵図のとおり、本丸の周囲に方形の堀が巡っていたことが明らかとなりました。

明智光秀の娘婿であった織田信澄は、本能寺の変の後、織田信孝（おだのぶたか）（信長の三男）と丹羽長秀（にわながひで）に襲撃され、大坂城で自害しました。その後、丹羽長秀、加藤光泰（かとうみつやす）、生駒親正（いこまちかまさ）、京極高次（きょうごくたかつぐ）らが城主となりました。その後、城は取り壊され、部材の多くが水口岡山（みなくちおかやま）城（甲賀市）へ移築されたと伝えられます。

現在、強固な野面積み石垣をもつ天守台（高島市指定文化財）と乙女ヶ池の水面だけが当時の姿を伝えています。

大溝城跡天守台

乙女ヶ池から大溝城跡をのぞむ

大溝陣屋と城下町（おおみぞじんやとじょうかまち）

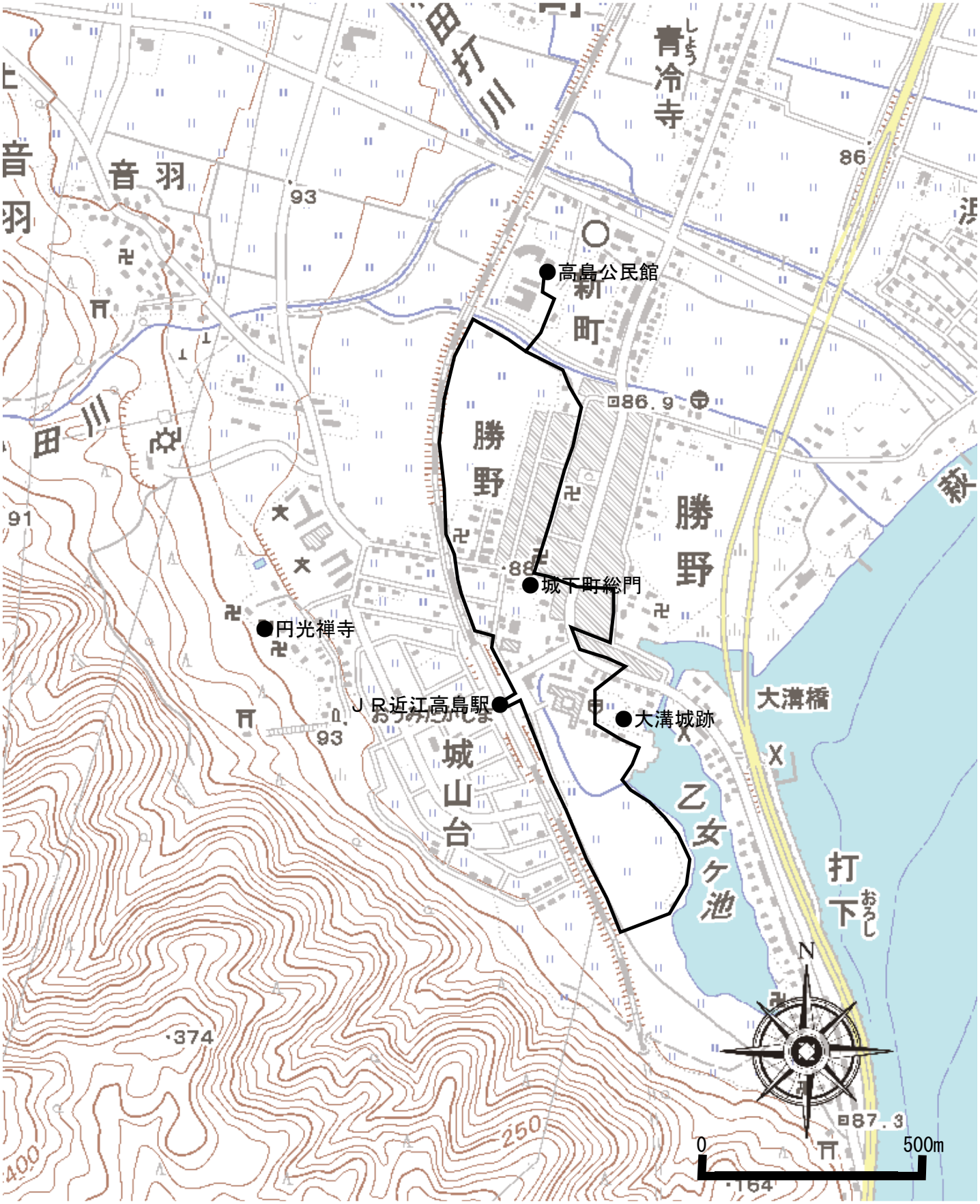
分部光信（わけべみつのぶ）は元和５年（1619）、伊勢国上野から、高島郡・野洲郡で２万石を与えられ、大溝に入封し、大溝藩初代藩主となりました。分部家は、伊勢国人長野氏の家臣から戦国武将となった家柄です。織田信長の命により、長野家が信長の弟信包（のぶかね）を養子に迎え、分部氏はその家老となりました。信長の死後、分部氏は豊臣秀吉に仕え、秀吉の黄母衣（きほろ）十騎（親衛隊）に加わるまで栄進しました。慶長５年（1600）の関ヶ原合戦には東軍に属して安濃津（あのつ）城に籠城し、西軍３万の大軍を迎え撃つ激戦を展開し、その功により２万石に加増されました。

新領地に入った光信は、大溝城跡の三の丸に陣屋を構え、その西方一帯に武家屋敷を配し、陣屋北側を中心に城下町を整備しました。陣屋は、周囲に巡らせた堀の内側を郭内と呼び、内部には藩庁や藩主住居、練兵堂、脩身堂、米管理所などの建物がありました。明治以降、ほとんどの建物は解体されましたが、長屋門型式の総門（高島市指定文化財）が現存します。

城下町には、琵琶湖の港である２ヶ所の舟入りを設け、職人・商人が住む場所として勝野町、長刀町、江戸屋町、伊勢町などが新たに設けられました。当時から残る町家や短冊形をした屋敷割り、街路の中央を流れる水路が城下町の風情を今に伝えています。また、城下の西側にある円光禅寺は転封（てんぷう）の際に伊勢国上野から移ってきた分部家の菩提寺であり、境内には歴代の藩主の五輪塔が並ぶ大溝藩主分部家墓所（滋賀県指定史跡）があります。

大溝陣屋総門

旧大溝城下の町並み


高島公民館
城下町総門
円光禅寺
ＪＲ近江高島駅
大溝城跡
大溝橋
勝野
新町
音羽
青冷寺
乙女ケ池
打下
城山台
N
0
500m

大溝城跡周辺図

湖南の要　坂本城

坂本（大津市）は比叡山延暦寺の門前に広がる町場です。比叡山の山麓から琵琶湖岸にかけて広く展開しています。そのうち山麓部は上坂本（かみさかもと）と呼ばれ、主として延暦寺の里坊（さとぼう）や日吉社（ひよししゃ）の社司（しゃし）の屋敷などが分布しています。一方、湖岸は下坂本（しもさかもと）と呼ばれ、商工業者が多く暮らしていました。

上坂本は、山麓の日吉社に向かって東西方向にのびる日吉番場（ひよしのばんば）と、その一筋北にある東西方向の直線路である八条通（はっちょうどおり）を基軸として、寺家・社家や生源寺（しょうげんじ）・里坊などが建ち並ぶ、山門支配機構の中枢地域でした。いわば、坂本の宗教都市としての側面が集中した地域といえます。

下坂本には戸津（とつ）・今津（いまづ）・志津（しづ）という三つの湊があり、そのため三津浜（みつはま）と呼ばれていました。また、湖岸にそって北陸に向かう北国街道（ほっこくかいどう）が通っており、下坂本は水陸両方の交通の要所でした。このように下坂本は、坂本の経済都市としての側面が現れた地域ということができます。経済的に栄えていた下坂本には、馬借（ばしゃく）・車借（しゃしゃく）と呼ばれる運送業者や、土倉（どそう）・酒屋（さかや）と呼ばれる金融業者が数多く活動していました。

また、坂本には湖上を行き来する船から関料を徴収する湖上関（こじょうせき）が山門（さんもん）により設置され、「坂本七ヶ関」「山門七ヶ所」「日吉七ヶ関」などと呼ばれていました。延暦寺は、湖上関から徴収した関料を諸堂舎の修理や維持管理の費用に充てていました。

このように宗教上・経済上の要所である坂本には、戦国時代、京都をおわれた室町将軍がしばしば滞在しています。それは、坂本が京都から近江への入口だからというだけでなく、延暦寺が支配する地域であることが関係していたようです。京都を本拠とする室町将軍は、同じく京都を本拠とする寺社本所（じしゃほんじょ）とは共存関係にあり、将軍はしばしば地方の国人（こくじん）たちに押領された寺社本所領の回復を命じています。寺社本所の代表的存在である延暦寺にとってもそれは同様であり、山門領の回復を将軍に期待しているのです。こうした両者の関係に基づき、室町将軍は坂本にしばしば滞在していると考えられます。12代将軍足利義晴（あしかがよしはる）や13代将軍足利義輝（あしかがよしてる）が坂本に滞在し、義輝は坂本の日吉社社司の館で元服し、征夷大将軍の就任式を行っています。

しかし織田信長の上洛によって延暦寺と坂本の運命は大きく変わります。元亀争乱の中で延暦寺は信長と敵対したため、元亀２年（1571）９月、信長によって焼き討ちされ、力を失います。かわって、信長の家臣明智光秀が志賀郡を領地として与えられ、坂本に城を築きます。光秀が坂本城を築いたのは三津浜と呼ばれた下坂本の湊があったあたりでした。信長は、坂本を近江支配の拠点の一つと定めたのです。

本能寺の変を経て天下人が信長から羽柴秀吉へと移り変ると、坂本の地位も変化します。天正14年（1586）、大津築城により坂本城は廃城となります。秀吉が大坂城を本拠としたことで、京都・大坂との連絡に有利な大津を重視したためといわれています。またこの時期、秀吉は安土城をはじめとする信長時代の拠点城郭を廃し、新たな拠点城郭を整備します。信長から秀吉へという天下人の移り変わりを、拠点城郭の変化で示そうとしたことも坂本廃城の理由です。

坂本城跡（さかもとじょうあと）

元亀２年（1571）９月、比叡山の焼き討ちを行った後、織田信長は志賀郡を明智光秀の領地として与えました。そして比叡山延暦寺の監視と、琵琶湖の制海権獲得のため、光秀に命じて交通の要所である坂本（大津市）の地に城を築かせました。以後､坂本城は明智光秀の居城であるとともに、信長による近江支配の拠点城郭としての役割を担うようになります。

光秀は天正10年（1582)の本能寺の変で信長を討ち取りました。しかし､毛利攻めより急きょ取って返した羽柴秀吉と山崎の地で戦い、これに敗れます。それを知った光秀の女婿明智秀満（あけちひでみつ）は、留守居として守っていた安土城（近江八幡市・東近江市）を出て坂本城へ向かいます。途中､秀吉方の堀秀政（ほりひでまさ）の軍勢と出会い､琵琶湖を渡って坂本城に入りました。そして城に居た光秀の妻子とともに城に火を放ち、自害しました。こうして坂本城は焼失します。

信長の死後開かれた清須会議（きよすかいぎ）によって、近江の志賀郡・高島郡は丹羽長秀の領地となります。長秀は、すぐに坂本城の再建に取りかかりました。天正11年（1583）の賤ケ岳の合戦後、越前・若狭の領主となった長秀に代わり、秀吉の家臣杉原家次（すぎはらいえつぐ）が坂本城主となりました。その後すぐ､浅野長吉（あさのながよし）が新たな城主となります。坂本城は、信長の死後も、近江の拠点城郭としての意義を失っていなかったのです。しかしその後、小牧長久手の合戦を経て羽柴秀吉が天下人の地位を確立すると、秀吉は長吉に命じて大津城（大津市）を築城し、坂本城は天正14年（1586）頃に廃城となりました。

城跡は琵琶湖岸に石垣の一部を残す以外、ほとんど痕跡が残っておらず、その正確な位置すらわかっていません。残されたわずかな史料からは、天主を持つ城であったこと、湖岸に位置し、縄張が湖とつながっていたことが分かる程度です。また、当時来日していた宣教師のルイス・フロイスは、坂本城について安土城に次ぐ豪壮華麗な城だったと記しています。

坂本城跡本丸推定地周辺

昭和54年（1979）に大津市が行った発掘調査で、明智秀満が城に火を放った時のものと考えられる焼土層が発見されました。焼土層の下からは光秀時代の礎石建物・石組み井戸等や、焼けた瓦・土器が、その焼土層の上にある整地した層からは丹羽長秀時代の礎石建物や石組み溝等が発見されました。平成６年（1994）の渇水時には湖中の石垣が姿を現し、基礎に胴木（どうぎ）が据えられていることが確認されました。

姿を現した湖中石垣

また、平成21年（2009）から24年（2012）にかけて聖衆来迎寺の表門が解体修理された際、部材を詳細に調査した結果、もとは櫓門であったことが分かりました。部材の一部に15世紀中頃から17世紀前期のものとみられる鉋（かんな）の刃の痕跡等が見つかり、伝承通り坂本城の城門の部材が転用された可能性が高いことが確認されました。

西教寺（さいきょうじ）

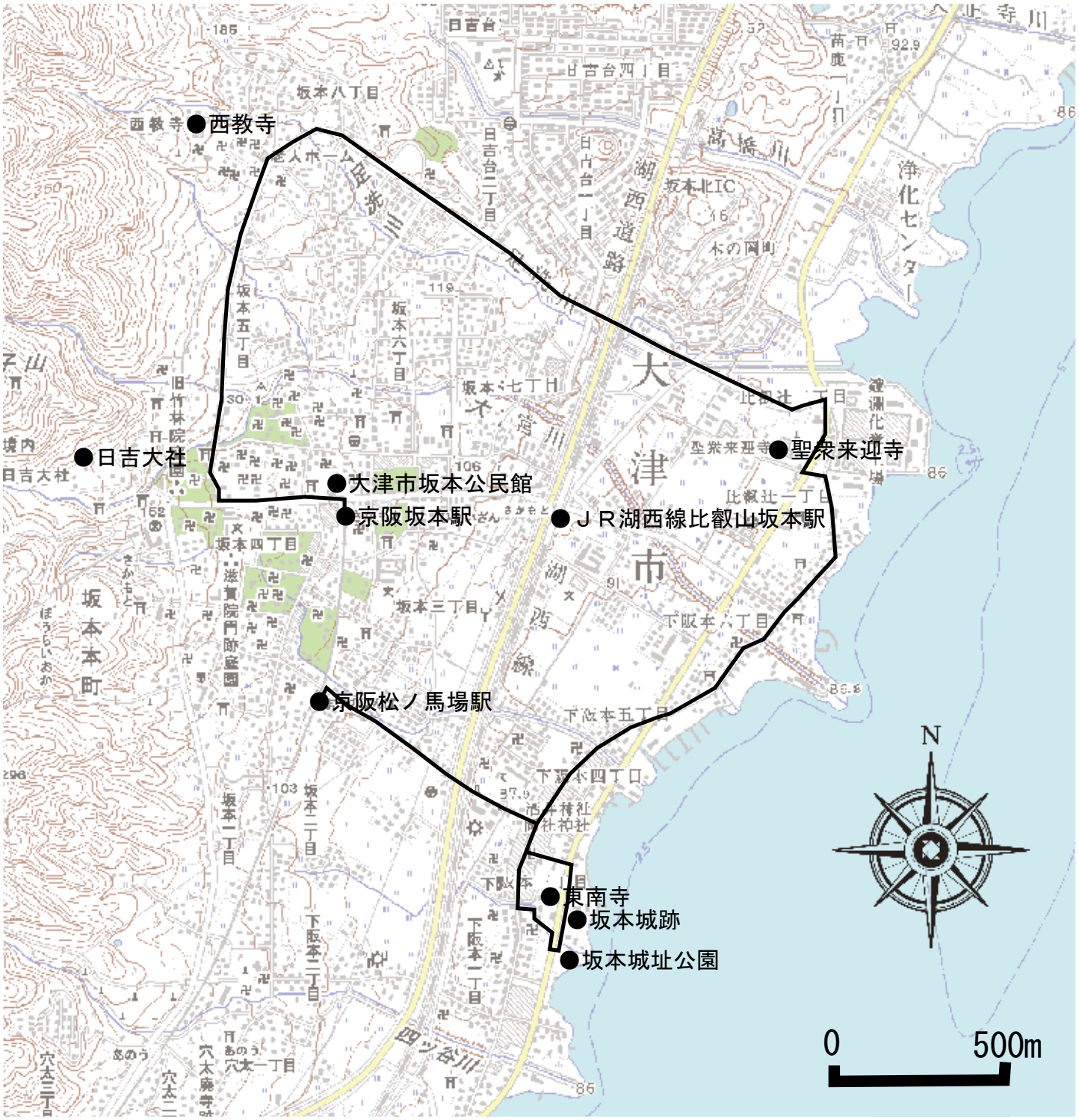
西教寺（大津市）は聖徳太子草創という伝承を持つ天台真盛宗（てんだいしんせいしゅう）の総本山です。平安時代に延暦寺中興の祖良源（りょうげん）が草案を結び、後に横川の恵心僧都源信（えしんそうずげんしん）が伽藍を建立したと伝えられます。文明15年（1483)、真盛上人（しんせいしょうにん）が西教寺に入寺しました。以後真盛は、各地へ念仏説法の旅を重ね、衰退していた西教寺の再興に尽力しました。

戦国期には室町幕府や近江守護六角氏の保護を受け、元亀２年（1571）の織田信長による延暦寺焼き討ちの後も、元亀４年（1573）に明智光秀により、今堅田の合戦で討ち死にした家臣の追善供養のために米が寄進されるなど、いち早く復興を遂げています。以後明智家中の菩提寺として境内に光秀や明智一族の供養塔が建てられ、光秀の正室を埋めたと伝えられる墓があります。

光秀は、延暦寺焼き討ち後の西教寺の復興に尽力しています。現在の本尊である木造阿弥陀如来坐像を甲賀郡から移動させ、仮本堂や鐘楼等を再建しています。また坂本城の城門を総門として寄進したと伝えられています。

聖衆来迎寺（しょうじゅらいこうじ）

聖衆来迎寺は、天台宗の宗祖伝教大師最澄を開基とする寺院です。宇佐山（うさやま）城将の森可成（もりよしなり）が討ち死にした時、その遺骸を引き取って葬ったことから、元亀２年（1571）の信長による延暦寺焼き討ちの際、焼き討ちを免れたと伝えられます。寺には、森可成の墓があります。坂本城主となった明智光秀は聖衆来迎寺をその後、厚く保護しました。坂本城は後に廃城となりますが､その城門は聖衆来迎寺の表門として移築されたと伝えられます｡表門の解体修理によって、その伝承のとおり、坂本城の城門が移築されたものである可能性が高くなりました。


西教寺
日吉大社
大津市坂本公民館
京阪坂本駅
ＪＲ湖西線比叡山坂本駅
聖衆来迎寺
京阪松ノ馬場駅
東南寺
坂本城跡
坂本城址公園
N
0
500m

坂本城跡周辺図

元亀争乱　江南の戦い

元亀元年（1570）４月、浅井長政離反の知らせを受け、急きょ京都に入った織田信長は、そこから本拠である岐阜を目指します。岐阜と京都間のルートは、通常であれば東山道を使います。永禄11年（1568）の上洛の時も、東山道ルートで美濃から近江に入りました。しかし、それには江北を支配する浅井氏が信長の近江入国を容認するということが前提となります。お市の方と浅井長政との婚姻によってそれが可能となったのです。

しかし、浅井長政が離反したことにより、東山道を通って江濃国境を超えるのが難しくなりました。岐阜へ戻るにあたり、信長は、宇佐山（うさやま）（大津市）に森可成（もりよしなり）、守山（守山市）に稲葉一鉄（いなばいってつ）、永原（野洲市）に佐久間信盛（さくまのぶもり）、長光寺（ちょうこうじ）（近江八幡市）に柴田勝家（しばたかついえ）、安土（近江八幡市）に中川重政（なかがわしげまさ）を配置しました。宇佐山は、湖西を通り北国から京都へ入る北国街道を押さえる位置にあり、守山と長光寺は東山道（とうさんどう）を押さえる位置にあります。また、永原と安土は、後の朝鮮人街道の前身となる下街道（しもかいどう）沿いに位置し、いずれも愛知川より南の、近江南部の岐阜・京都間のルート上の要地にあたります。信長にとって、京都との関係を維持する上で、近江南部地域は生命線といってもいい重要な場所だったのでしょう。江北の浅井氏が離反した段階でも、近江南部を押さえておこうという意図が、こうした配置からうかがえます。

本来であれば、そのまま愛知川を越え、東山道を通り岐阜に戻るはずでしたが、浅井氏の離反により、信長は愛知川の手前で道を東にとり、愛知川の南を通る八風街道（はっぷうかいどう）から伊勢へ抜けるルートを選択したようです。しかし、浅井氏が愛知川まで南下してきたため、八風街道を通らず、南へ進路を変えて日野を経由し、甲津畑（こうづはた）（東近江市）から千草越（ちぐさごえ）で伊勢を通り、岐阜へと戻りました。この時、千草峠で六角承禎（ろっかくじょうてい）の依頼を受けた杉谷善住坊（すぎたにぜんじゅぼう）が信長を狙撃し、袖をかすめただけでかろうじて難を逃れたのは有名な話です。

元亀争乱を通して近江南部で信長と戦ったのは一向一揆でした。元亀元年（1570）９月、大坂本願寺は信長打倒ののろしをあげ、諸国の門徒に檄文（げきぶん）を発します。それに呼応するように、近江南部でも一向一揆が蜂起しました。その拠点となったのが金森（かねがもり）（守山市）・三宅（みやけ）（守山市）です。元亀２年（1571）９月、一揆の拠点金森を包囲した信長に対し、一揆勢は人質を出して降参します。しかし翌元亀３年（1572）はじめ、再度一揆勢が挙兵して金森・三宅に楯籠もります。対して信長は佐久間信盛に命じ、周辺の村々から一揆に与しない旨の起請文（きしょうもん）を提出させます。こうして一揆勢は孤立し、同年７月に金森・三宅両城が開城し、近江南部の一向一揆は解体されました。

永原御殿跡（ながはらごてんあと）

織田信長が整備した下街道（しもかいどう）は、後に徳川家康が関ケ原の合戦で勝利した際、京都へと向かう上洛道（じょうらくみち）として使われ、さらに江戸時代には朝鮮通信使が通る朝鮮人街道として使われました。この朝鮮人街道沿いに土塁（どるい）と堀が一部残る永原御殿跡（野洲市）と呼ばれる館跡があります。

慶長８年（1603）２月、家康は征夷大将軍になり江戸幕府を開きますが、大坂城には豊臣秀頼が居り、豊臣恩顧の諸大名が遍在する西国や京都の天皇に対処するため、しばしば江戸と京都・大坂を往来します。滋賀県にはその時に将軍が宿泊休憩する施設が４ヶ所設けられました。中山道柏原（かしわばら）宿に柏原御殿（米原市）、下街道沿いの伊庭（いば）に伊庭御殿（東近江市）、東海道水口宿に水口御殿（水口城）（甲賀市）、そしてここ永原御殿です。

永原御殿は、家康が７回、秀忠が３回、家光が２回利用しています。御殿を作事した京都大工頭中井家の指図（さしず）によると、家康と秀忠が使用した御殿は、本丸と南に突き出た二の丸からなっていましたが、寛永11年（1634）７月、家光上洛に先だって大規模な改修が行われ本丸と二の丸を西に大きく拡張し、堀と土塁を巡らせ、本丸の北西に御殿・休憩所・御亭を新造し、南東には三の丸を新造しました。

永原御殿跡土塁

平面形が台形状で西辺が長くなっているのは、寛永11年（1634）の作事によるもので、元は方形の単郭で、二の丸部分は角馬出（かくうまだし）ではなかったかといわれています。

永原城跡（上永原城跡）（ながはらじょうあと・かみながはらじょうあと）

永原城主であった永原氏は藤原秀郷（ふじわらのひでさと）の末裔という説と、佐々木経方（ささきつねまさ・つねかた）の流れとなるいう説があります。

江南一帯を佐々木六角氏が抑えていた頃には永原氏は六角氏の有力家臣とでしたが、織田信長が足利義昭を擁して上洛した永禄11年（1568）には、信長にも六角氏にもつかず没落したという説もあります。しかし、永禄12年（1569）の伊勢北畠氏の大河内城攻めには永原重康（ながはらしげやす）が進藤氏や後藤氏といった旧六角氏家臣とともに信長の陣に名を連ねており、また、元亀争乱の時には永原城に佐久間信盛を在城させるなど信長側についていたとみられます。

その後天正８年（1580）までは、佐久間信盛が野洲郡一帯を治めていましたが、信長が突如８月12日に信盛父子を高野山に追放し、野洲郡一帯は信長の直轄地となります。天正10年（1582）６月２日の本能寺の変後、秀吉時代に永原城がどうなったかは定かではありません。

上永原城跡（祇王小学校）

永原城は、現在の祇王（ぎおう）小学校のある場所で、城跡は佐久間与六郎信盛に因んで「与六郎」の小字名で呼ばれています。発掘調査で室町時代後半の遺物とともに礎石建物や井戸、掘、石敷き等が見つかっています。

菅原神社神門（すがわらじんじゃしんもん）

元は天満天神社と呼び、江部荘の産土神で菅原道真を祭神としています。明治に現在の神社名に改称しました。

神門は、全体に柱や木割が太く、大型で雄大な四脚門（しきゃくもん）です。建造年代を明らかにする資料はありませんが、板蛙股（いたかえるまた）や化粧棟木（けしょうむねぎ）下の花肘木（はなひじき）、実肘木（さねひじき）などの彫刻が室町時代後期の様式を示しておりこの頃に建てられたものと考えられます。棟中央に丸束（まるつか）を建て、組み物を積み上げる特異な構造手法を取り入れた華やかな意匠を示した門です。

土安神社（てやすじんじゃ）

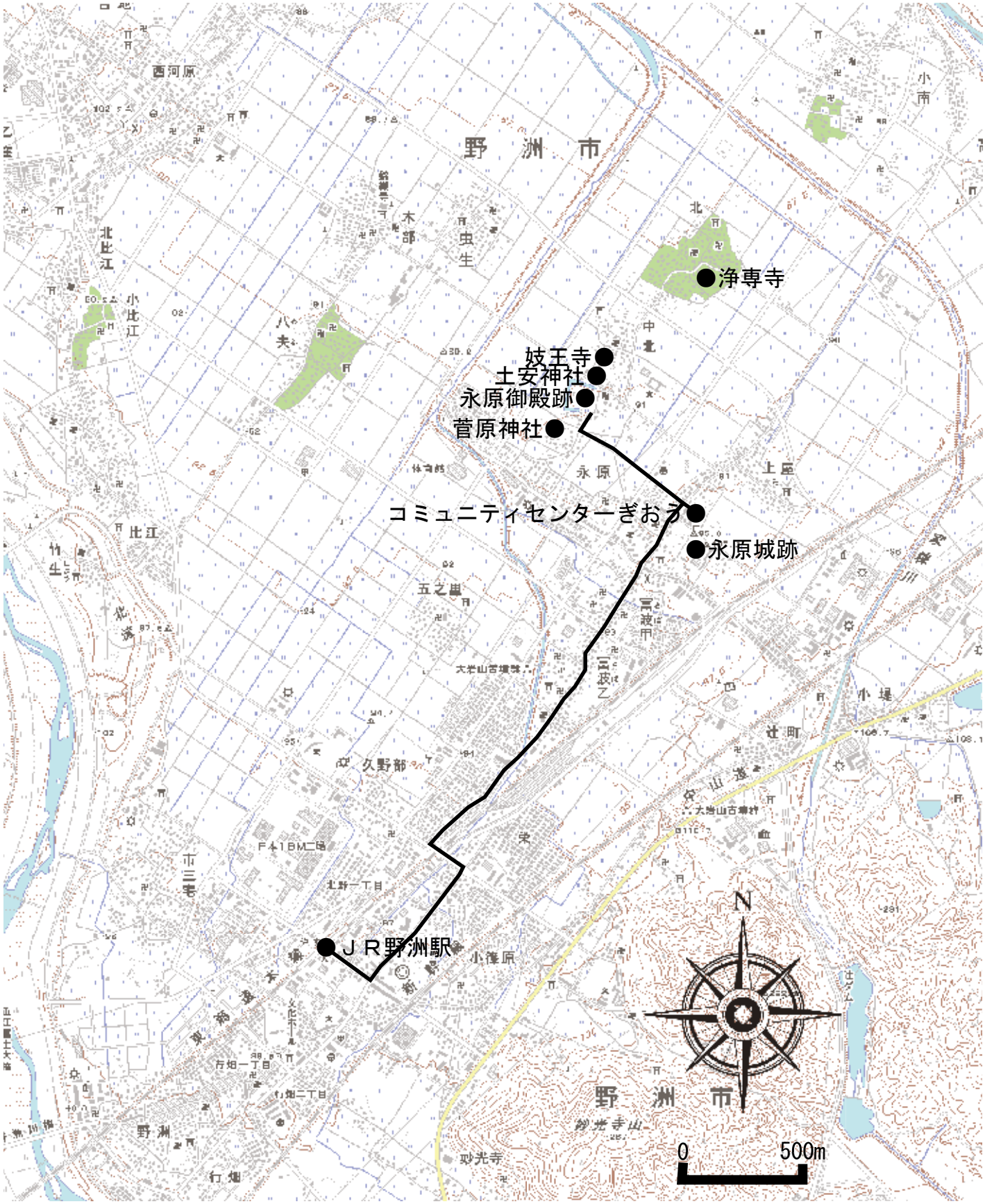
平安時代末期、平清盛の寵愛を受けていた白拍子（しらびょうし）の妓王（ぎおう）が、ふるさとの用水不足を清盛に訴え出たところ、清盛はさっそく三上山の麓を流れる野洲川より分水して水路を開削します。工事が難航した時、夢に１人の童子が現れ工事の手法を授けたことで水路は無事完成しました。この童子を土安神社に祀ったということです。

妓王寺（ぎおうじ）

「平家物語」で知られる白拍子の妓王・妓女（ぎじょ）姉妹とその母の刀自（とじ）、そして仏御前（ほとけごぜん）の菩提を弔うために建てられた小寺と伝えられ、４人の木像が祀られています。元は妓王が建てた宝衆寺といわれ、妓王が没した翌年の建久２年（1191）宝池山妓王寺と名付けられました。長享年間（1487～1489）に焼けた後、明暦２年（1656）に芦浦観音寺の舜興（しゅんこう）が再建したといわれています。

浄専寺表門（じょうせんじおもてもん）

永原御殿跡の北東の北という集落のはずれにある浄土真宗本願寺派の浄専寺に、永原御殿の門が移築されて残っています。永原御殿は徳川家光が２回目に使った寛永11年（1634）以後は使われることなく、貞享２年（1685）に廃止されます。御殿の一部は芦浦観音寺に書院として移築されたものが国の重要文化財として残されていますが、それ以外は、この浄専寺の門以外残っていません。永原御殿の遺構を伝える貴重な資料です。



永原城跡周辺図

信長の居城

清須城（きよすじょう）（愛知県清須市）

尾張国は守護斯波（しば）氏のもと、上四郡を管轄する岩倉（いわくら）方守護代織田伊勢守家（おだいせのかみけ）と、下四郡を管轄する清須方守護代織田大和守家（おだやまとのかみけ）により支配されていました。信長の出自は織田大和守家の三奉行の家でしたが、父信秀の代に尾張の実力者として台頭しました。清須（愛知県清須市）は、それまでの尾張国の守護所であった下津（おりづ）（愛知県稲沢市）が応仁・文明の乱の中で焼亡した後、守護所となった所で、五条川沿いに形成された自然堤防や後輩湿地上に立地しています。

清須の構造は、天正14年（1586）の織田信雄の改修によって大きく変化を遂げています。信雄による改修以前は、居館は五条川の東岸に位置していましたが、信雄段階では五条川の流路が大きく東側に変えられ、城の本丸が川の西岸に位置するようになりました。また、城下町全体が三重の堀に囲われ、巨大な惣構（そうがまえ）が出現しました。

一方それ以前の信長段階では、発掘調査の成果から、五条川東岸の方形居館とその周囲に小規模な武家屋敷群が広がり、町屋と思われる短冊形地割が出現している様子がうかがえます。『信長公記』には清須の町が惣構で囲われていたように記されていますが、遺構としては確認されていません。

信長は守護斯波義統（しばよしむね）の遺児義銀（よしかね）を擁立して清須方守護代勢力を駆逐し、清須を居城としました。尾張の有力国人領主として、まずは守護の権威をいただく上で、清須入城は必然だったと考えられます。

清須入城を果たし、清須方守護代勢力の実権を握った信長は、残る岩倉方守護代織田伊勢守家を永禄２年（1559）に滅ぼし、尾張一国を統一しました。翌永禄３年（1560）には桶狭間の合戦の勝利によってその実力を広く世間に知らしめました。そして永禄４年（1561）、今川と結んだ守護斯波義銀を清須から追放し、尾張一国支配の実権を掌握しました。

清須城跡に建つ石碑

●JR清洲駅
●清須城跡
清洲城跡
東海道本線
一場
五条川
朝日
野田町
下之切
北市場町
清洲工場
清洲町
清洲
新清洲
西田中
貝殻山貝塚
キリンビール工場
しんきよす
N
0
500m

清須城跡位置図

小牧山城（こまきやまじょう）（愛知県小牧市）

尾張一国を掌握した信長が次に攻撃目標としたのが隣国美濃です。美濃の戦国大名斎藤氏とは、道三（どうさん）の時代は娘の濃姫（のうひめ）が信長の正室となるなど、友好関係を結んでいましたが、道三が長男義龍（よしたつ）と対立し、義龍によって滅ぼされると、美濃と尾張は敵対関係となりました。

そうした中、永禄６年（1563）、信長は清須から小牧山へと居城を移しました。小牧山は、清須の北東約11キロに位置する標高85.9mの小山です。より美濃に近い位置への築城ということで、従来小牧山城は美濃攻略の前線基地と考えられてきました。しかし、近年城郭や城下町の発掘調査が進む中で、予想以上に整然とした大規模な城と城下町であったことが明らかとなり、尾張支配の拠点としての意味を持つ城であると評価されています。

小牧山城の構造は、大きく山頂部の遺構と山麓部の遺構とに分かれています。山頂部は主郭と考えられますが、中心部に現在小牧市歴史館が建っており、具体的な様相は不明です。ただ、山頂部の調査では主郭を取り巻く石垣が発見されました。現在は基底部から２、３石が残存しているだけですが、そうした石垣が階段状に２～３段に積み上げられていたことが確認されています。

また、山麓から主郭部に向かって直線的に伸びる大手道が現状でも確認できますが、発掘調査では信長時代の大手道が同じルートの下層から発見され、石積みが用いられていることが確認されました。

一方、山麓部からは土塁と堀で囲われた方形の郭が、東南麓から北麓にかけて山裾を取り巻くように並んでいることが確認されました。中でも、もっとも大きな東南麓の郭が信長の居館跡ではないかと想定されています。

小牧山城は、天正12年（1854）の小牧長久手の合戦で、徳川家康が布陣しました。そのため、その時の改修によって、信長時代の遺構がはたしてどの程度残っているのか注目されていましたが、発掘調査では天正期の改修は山復から山麓に限られ、主郭部は信長時代の遺構がほぼそのまま残っていたことが明らかとなりました。また、天正期の改修は土を用いて行われ、石造りの部分は信長によって整備されたと考えられています。

信長時代の小牧山城は、石垣で覆われた山頂の主郭部と土造りの山麓郭群からなっていました。これまで、信長の城で石垣が確認されていたのは岐阜城がもっとも古かったため、それよりさらにさかのぼる時期に石垣が使われていたことが確認されたことで、信長の城造りのルーツとして注目されています。

小牧山城跡直線の大手道

●小牧山城跡
名鉄小牧駅●
小牧市
小牧山
堀の内
堀の内二丁目
堀の内四丁目
堀の内五丁目
堀の内一丁目
元町
元町二丁目
元町三丁目
元町四丁目
高速十二号小牧線
川内一丁目
川内二丁目
外堀一丁目
外堀二丁目
外堀四丁目
小木一丁目
小木東二丁目
下小針中島一丁目
小針
西島町
村中新町
間々本町
山北町
弥生町
市民会館
小牧二丁目
小牧一丁目
図書館
小牧五丁目
美術館
小牧三丁目
小牧四丁目
常普請一丁目
常普請二丁目
桜井
桜井本町
郷中一丁目
郷中二丁目
若草町
東新町
緑町
新町一丁目
新町二丁目
小牧原新田
用水
N
0
500m

小牧山城跡位置図

岐阜城（ぎふじょう）（岐阜県岐阜市）

永禄10年（1567）、信長は斎藤龍興（さいとうたつおき）を美濃から逐い、その居城井口（いのうち）に入城しました。そして、その地を岐阜とあらため、新たな居城としました。

岐阜城は、長良川の扇状地に隣接する標高329mの金華山（きんかさん）上に築かれました。また、山麓にも居館があったことが岐阜を訪れた宣教師ルイス・フロイスの記録に記されています。そして扇状地部分に斎藤氏の城下町を引き継ぐような形で城下町が建設されました。

岐阜城の構造については、発掘調査によって山麓部の居館跡の状況がかなり明らかになっています。まず、居館の入口部分では、巨石を並べた石垣が発見されました。

入口を過ぎると、谷を中心に川が東から西に向かって流れ、その両側に郭が階段状に広がっています。谷川の南に広がるもっとも広い郭からは建物の痕跡が見つかっており、館の中心建物があったと想定されています。谷川の北側からは巨石を背景とする庭園跡が見つかっています。

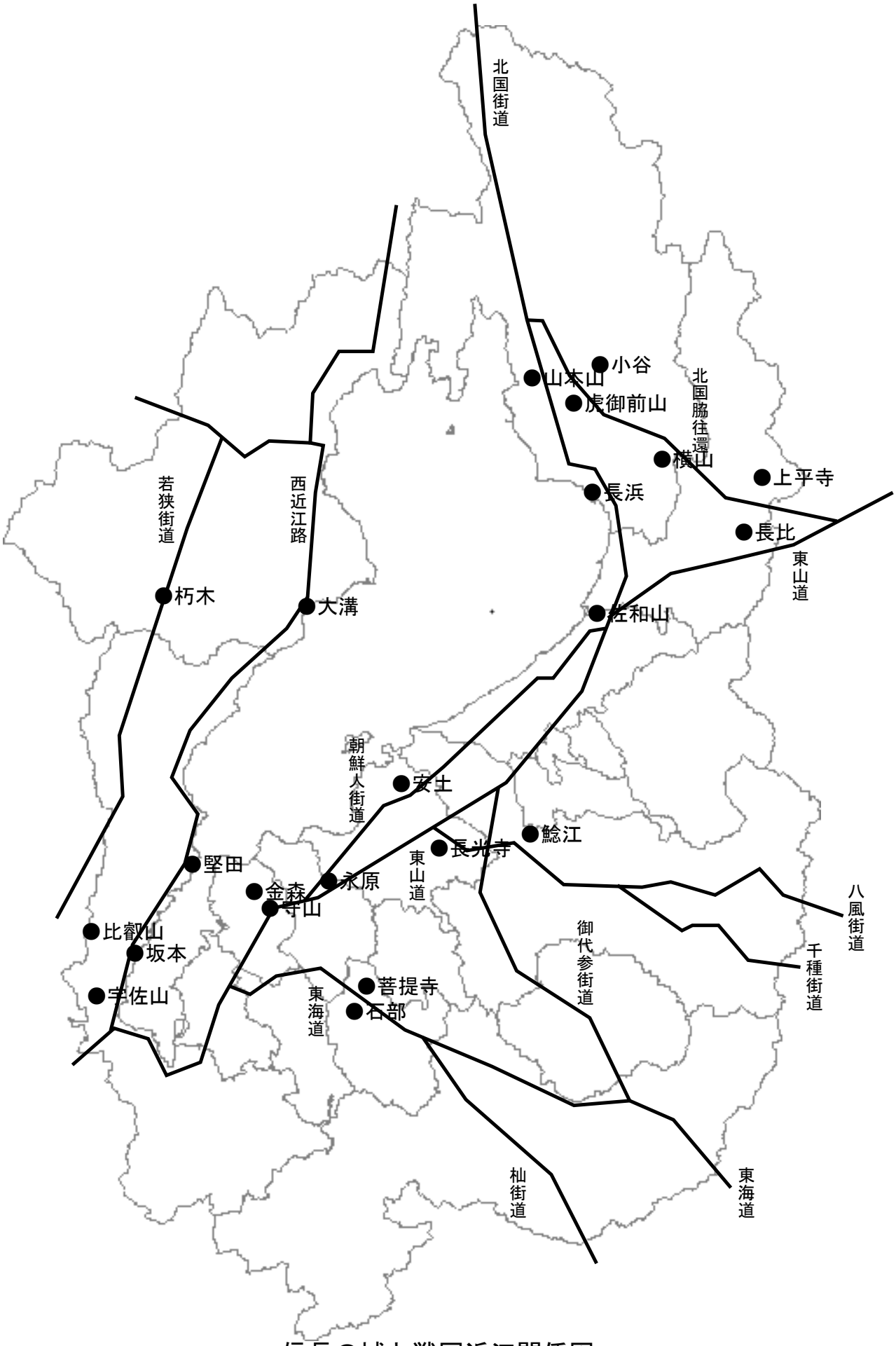
このように、山麓の居館跡は、巨石を多用した石垣づくりの館跡で、小牧山城に導入された石垣がさらに多く取り入れられています。また庭園が多く造られるなど、単なる軍事施設ではなく、来訪者をもてなす工夫がなされていたことも注目されます。フロイス以外にも公家の山科言継（やましなときつぐ）や茶人の津田宗及（つだそうぎゅう）も岐阜城を訪れており、信長に歓待されたことが記録に記されています。

山頂部の遺構は、復興天守をはじめとする様々な観光施設によって調査が難しいため未確認のものがほとんどですが、現状でも石垣造りの虎口（こぐち）や郭（くるわ）、堀切（ほりきり）や竪堀（たてぼり）などの遺構を見ることができます。

ところで岐阜城からは金箔瓦が発見されており、永禄10年の信長時代より金箔瓦が使用されていたかどうかが議論となっています。山上部でみつかった金箔瓦は遺構に伴うものではなく、年代を決定する決め手に欠けていました。そのため、信長段階での金箔瓦使用については疑問視する見解が一般的でしたが、最近の山麓居館跡の調査で、中心建物跡付近で金箔瓦が発見され、にわかに信長段階での金箔瓦使用が現実味を帯びてきています。

岐阜城跡　山麓部居館跡虎口

岐阜城跡位置図



信長の城と戦国近江関係図

目　　次

信長の城と戦国近江	1
安土城と城下町	2
元亀争乱　江北の戦い	15
琵琶湖城郭ネットワーク	19
湖南の要　坂本城	23
元亀争乱　江南の戦い	27
信長の居城	31

発　行　　平成 30 年（2018 年）10 月 4 日

編　集　　滋賀県教育委員会事務局文化財保護課

〒521-1311

滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 6678

城郭調査事務所

TEL0748-46-6144　FAX0748-46-6145

Mail　ma16@pref.shiga.lg.jp